

第四十三話 平成三十年四月三日

[心の丈]は見えにくい

「背の丈」はひと目見れば一目瞭然。だが、[心の丈]は一目瞭然とはいかぬ。顔を見ても[心の垢]がどれほど溜まっているか、見えぬ。[心の裏]もしかり。

[心の熾 {おき}]もスマホ流行りで死滅する。
[心粧い]もメイク術のアレコレで忘れ去られる。
[心を鬼にする]もパワハラ退治ブームで死語になる。

日本語には[心の.....]が80語ほど。
<心音>とか[心.....] は70語ほど
<心を合せる>とかの[心を.....]が30語ほど
<心外>などの[心]につづく語が200語ほど
<心悲しい>の {うら} と読ませる語が30語ほど
<心地よい>の {ここ} と読ませる語が7語ほど
<心移り>の {こころ} と読ませる語が140語ほど。

「心」心の語彙がこれほどまであるのは[日本語]だけであろう。
「心」を大事にすると云うより、「心」とは、森羅万象を映し出すもの。人とは厄介な生き物だと承知していたのではないか。

科学の進歩で世界を牛耳ったEnglishが幅を利かす。
幼児教育でも職場でも。
で、E n g l i s もなかなかの達者な言語だと云う御仁も多い。

Englishは元来、<土人の言葉>となじる爺は
[心狭し]国粹主義となじられる。
が、爺の[心の丈]はそんな<偏狭>ところにあるのではない。